

『羊の歌』『美竹町の家』を読む

立命館大学大学院文学研究科 福井優

1. 概要

加藤周一（1919～2008）「美竹町の家」『羊の歌——わが回想』岩波新書、1968年、81～93頁、改92～105頁

- ・1931年4月～36年3月、東京府立第一中学校に在学（12～17歳）
- ・「私は美竹町の極度に禁欲的な家庭と軍国主義的秀才教育の模範的な学校との間を往復し、大いに退屈していたけれども、その他のどんな生活をみずからきりひろくこともできなかった」（88頁、改99頁）

→「空白五年」：学校生活

「美竹町の家」：家庭生活

加藤が東京府立第一中学校に入学してまもなく、一家は渋谷金王町から美竹町へと転居した。医者である父信一（1885～1974）は、美竹町で新たに開業するも全く流行らず、一家の生活は切り詰められていた。しかし母織子（1897



～1949）によって、家計は正しく管理され、一家は慎ましい平穏な生活を送っていた。

一方で、母方の祖父増田熊六（1866～1939）は「昭和恐慌」の煽りを受け、家産が傾き始めていた。家の没落が進めば進むほど、熊六の放蕩はひどくなり、特にその女性関係を巡って、父信一と母織子の意見対立も激化する。熊六の放蕩を厳しく批判する父とそれに同情を寄せる母。中学生の加藤は、祖父のような華やかな女性との交際に憧れながらも、自身の経験の乏しさを自覚し父の議論を採用する。

増田家に対して、祖母ツタの親類たちは栄えていた。大叔父の海軍少将である岩村清一は、日米開戦にも反対した見識のある軍人で、加藤の一家とも親しく、オークション・ブリッジなどの英国の文化を加藤に教えた。また加藤は、同時期に岩村が艦長を務める巡洋艦を見学し、水兵たちの秩序立った動きに美を見出す。そのような加藤にとって、5年間の日課となったのは、二階の父の書斎から窓外の夕暮の景色を眺めることだった。そして、その夕暮の美しさに深い感動を覚える。

本章は、美竹町での家庭生活を「空白」としながらも、祖父の女性関係を巡る両親の対立や、秩序や夕暮に美を発見するといった描写から、加藤の「自立」の兆しが暗示される。それと同時に、恐慌に伴う熊六の没落と親族内部の変化を通じて、日本が戦争への道を歩み始めたことも示唆される。

II. 内容

「美竹町の家」の生活空間 (1)

引用1 (81~82頁、改92~93頁)

私が中学校へ入った頃、一家は宮益坂をのぼって坂の右側から左側へ引越しをした。金王町の古い家は、豪家の一部を切りはなして移築したもので、住むにも不便であり、開業医の仕事にも適さなかったから、美竹町の祖父がもっていた土地を借りて、新築したのである。土地は、祖父の屋敷よりも一段と高い崖の上であり、反対側は氷川神社〔御嶽神社〕の垣に接していて、もと私用の庭球場になっていた。〔……〕庭球場はつぶされて、その代りに木造二階建の新築の白い家が建った。〔……〕しかしそのために多勢の患者が美竹町の家を集るということはなかった。〔……〕私たちの日常生活は、まえよりも却って切りつめられていた。

- ・1931年頃、加藤の一家は渋谷町大字金王町の、父方の祖父加藤隆次郎が信一のために建てた家から、同美竹町（現在の東京都渋谷区渋谷1丁目の南半分）に転居
- ・相変らず開業医は流行らず、家計は切り詰められていた。信一の生家からの食材の仕送りで食うに困ることはなかったが、買い物や娯楽に使う現金を節約していた

引用2 (82~83頁、改93~94頁)

父自身が煙草を吸わず、酒を飲まず、庭で薔薇をつくることの他には、格別の道楽を知らず、全く質素な生活に甘んじていた。金を使う必要を感じなかったから、金をかせぐことにも熱意がなかったのかもしれない。父はそのこのことを「質実剛健」という言葉で表現していた。

〔……〕母はその予算を、私にも、また雙葉高等女学校へ通いだしていた妹にも、はっきりと説明していた。私たちはこれを買うためには、それをあきらめなければならないということを、よく知っていたから、無理に何かを買ってくれと行って、親に「ねだった」ことは、おそらく一度もない。その頃、美竹町の家には、押し売りや乞食のやってくるものがあつた。応待に出た母は、さまざまの口実を設けて押し売りを拒絶し、乞食には最小限度の金をあたえていたようである。

- ・お金を稼ぐことに熱意のない「質実剛健」な父と、ひとりで家計を切り盛りする母
父と母とのパーソナリティの違いを二項対照的に表現（「渋谷金王町」を参照）
地方出身、武士・農民的、質実剛健な父⇔都市出身、町人的、ハイカラな母
→対照的な父と母、そして両親に従順な兄妹の慎ましい生活

（加藤の一家は、1920年代に都市部で形成された、新中間層の性別役割分担家族の典型例。核家族であるこのような家庭では、教育では「母性愛」が強調され、子どもたちは「童心主義」を内面化するよう育てられた〔小野沢2014:111-116〕〔大門2019:4章〕）

「美竹町の家」の生活空間 (2)

引用3 (83頁、改94頁)

美竹町の家に移って後、祖父の家はいよいよ近くなり、行き来がふえると共に、その家のなかの大小の出来事もいつとはなしに聞えてくるようになった。大阪の叔父が結核で亡くなると、叔母は娘を連れて生家に戻って来た。

- ・母方の祖父増田熊六の家に戻ってきた叔母は、織子の妹で三女の増田道子（1900～87）と思われる。道子は大阪の会社員で婿養子の夫亮四郎（1890～1939）が肺結核で死去したため、子どもを連れて帰ってきた
- ・道子の子どもは「二児」「一男一女」とあるが、正確には「一男二女」[鷺巣 2018:32]
「長男は私と同年で、はじめから祖父母の家にあずけ、東京の師範附属小学校へ通わせていた」(83頁、改94～95頁)→青山師範学校附属小学校に通っていた良道(1919～2011)
「私の妹よりも一つ年下の娘」→華子（1921～2010）／夏子（1925～48）
- ・長女の幾子（1894～51）は政友会の代議士、藤山竹一（1885～1930）に嫁し、夫の死後、生家に一人息子の櫛一（1915～94）を連れて戻る
→熊六・ツタの家の近辺に、三姉妹（幾子・織子・道子）のそれぞれの家族が集中する

斜陽の増田家

引用4（84～85頁、改95～96頁）

祖父の事業は、一九三〇年代を通じて、容易に恐慌の痛手から立ち直らず、沢山の貸家の一部を借金の穴埋めに、手放すというようなことがあった。しかし祖父は、たとえ家屋敷を抵当に入れても、その生活の様式を容易に変えようとする人ではなかった。相変らず出かけるときには、身だしなみに念を入れ、外国製の香水を惜しみなくふりかけていた。女友だちとの交際はかえってさかんなほどであった。そのために祖母はときどき気がいじみた発作をおこし、着物をひき裂いたり、食器を庭石に叩きつけたりした。同居していた叔母は、おとなしく気が弱かったから、自分だけの手に負えなくなると、崖の上の家まで母をよびに来た。[……]しかし祖父の家のもめ事に、母がひとりで出かけてゆくことを、私や妹は好まなかった。叔母の興奮した様子や母の常ならぬ顔つきを見て、母の身の上を心配したのである。ながい間待った末に、やっと帰ってきた母が、ひとりで泣いていることもあった。そういう母を何とかして慰めたいと私たちは思ったが、どうしようもなかった。

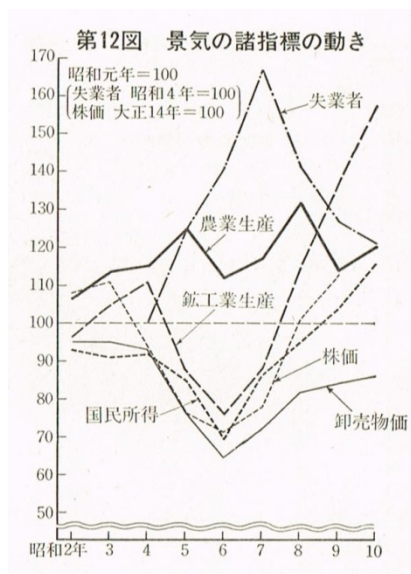
- ・「昭和恐慌」：1929年10月に起きたニューヨークの株式市場の大暴落に端を発する世界恐慌は日本にも波及。日本は金解禁に踏み切り緊縮財政下であったため深刻な不況に見舞われるも、「高橋財政」によって、32年から回復過程に入る。一方で、積極財政により政府の軍事費支出は増加。また大企業と農村との格差は拡大し、社会不安と政治的危機意識が醸成される [武田 2014]
→満州事変(1931年9月)、ヒトラーがドイツ首相に就任(1933年1月)、2・26事件(1936年2月)
- ・司馬遼太郎（1923～96）の証言：「昭和五年（一九三〇）の大恐慌は少年の身にも、“空

気、として相当にこたえました。いくら、道をうつむいて歩いても五銭玉ひとつ落ちていない。五銭でパンが買えますからね。町には失業者があふれ、国じゅうが不景気にあえいでいた」[司馬 1999:8]

- ・東京に相続した広大な土地を持ち、貿易仲買の事業で第一次世界大戦中に財を成した熊六も不況の余波を受ける（本章8段落でもチャーホフの「桜の園」を引き、没落の様子を描写）

その後も状況は好転せず、「美竹町の祖父は、その商売が傾いてきたときに、家屋敷と共に、渋谷の土地を抵当に入れ、それが抵当流れになったとき、目黒区の小さな家に移り、[……] 陸軍の恩給の他に、道具類を売って暮した（174頁、改197頁）

→恐慌により家の没落は加速するも、それと反比例するかのよう「放蕩」に耽る熊六。熊六・ツタ夫妻に生じた不和は、崖の上に住んでいた信一・織子夫妻にも暗い影を落とす。「私たちは、母が泣いていても、父が慰めに来ないのは、なぜだろうかと考えていた。おそらく母を泣かせているのは、単純に崖の下の家でおこったことばかりではなく、そのことと関連して父の態度でもあるだろうと想像もしていた」（85頁、改96頁）



[大内 1967:182]

祖父を巡る父母の意見対立の激化

引用5 (85頁、改96頁)

父は祖母が食器をこわした話を聞くと、「なに大丈夫さ」といった。「ヒステリーの患者は自分の身体を傷けないものだ。こわした食器もいちばん高価なものではあるまい」。また祖父については、騒ぎのもち上がったときばかりでなく、日常絶えず同じ批判をくりかえしていたようである。その一つは、もしほんとうに金に困って、家屋敷を抵当に入れなければならないほどならば、なぜ節約しないのか〔①〕、というのであり、もう一つは、そもそも妻子ある身で他の女とつき合うのはけしからぬ頹廢ではないか〔②〕、というのであった〔傍線福井、以下も同様〕。

①経済状況

母織子：「あれでも女中を減らしたり書生をおくのをやめたり、節約のつもりでいるのでしょうけれど……」「あなたのようにほきませんでしょう、人それぞれですから」

父信一：「そんなことは節約ではない、あたりまえだ」「そんなことをいってられる立場ではあるまい」

②女性関係

父信一：「二人の女を愛するというのは、誰も愛していないということだ。女遊びにすぎない」「どうかな、神を本気で愛すれば、それだけ夫を愛することは少なくなるだろう」

母織子：「そうかしら、信者が神を愛して、また夫を愛するということもあるでしょう」

「でも一人の女に情の深い人は、他の女にも情が深いということがあるでしょう……」

- ・母は祖母の行為にも否があるとして、祖父を擁護。語り手＝加藤自身も祖父の肩を持つ。なぜならば父信一は、そもそも散財や女遊びといった「放蕩」をしない／できない性格だったから、「放蕩」がいけないと考えるようになったのであり、祖父とは全く異なる
- ・「母はその「人間らしさ」を貴んでいたし、父はその「道徳」を強調していた」（86頁、改97頁）＝祖父の「放蕩」を「非難」する父、「説明」する母（7頁、改8頁）

→父母の見解の相違を受けて、中学生の加藤の立場が示される。「私はといえば、ただひとりの女さえも知らなかったもので、そういう私自身のあり方を正当化するためには、父の議論を採用した方が都合がよからうと考えていた」（86頁、改98頁）

加藤が父の議論を「採用」した理由（1）

引用6（87頁、改98～99頁）

〔父は〕恋愛感情は性欲にもとづく、性欲は食欲と同じように動物に共通の本能である、崇高どころか格別に人間的なものでさえもないだろう——という次第で、〔……〕そういう話を聞かされていた私は、いわば恋愛を知るまえに、その批判を、夢に耽るまえに、夢のあとの幻滅を知ったのである。忠臣蔵の芝居をみるまえに、私は芥川竜之介の「大石内蔵助」〔「或日の大石内蔵助」〕を読んでいて。西洋中世の騎士物語を知るまえに、その痛烈な批判の書、「ドン・キホーテ」を知っていた。騎士物語から「ドン・キホーテ」への道は、おのずから通じている。「ドン・キホーテ」から騎士物語への道は、長い迂回を必要とするだろう。

- ・文学を蛇蝎の如く嫌い、「実証的なものの考え方を、日常生活のなかにまで拡張しようとし」（47頁、改53頁）た父は、「恋愛」に対しても極めて即物的で冷淡な考えを持っていた。加藤は、自身がこのような父のものの考え方から強い影響を受けていることを自覚
- ・忠義や仇討を批判する「或日の大石内蔵助」から忠臣蔵へ、騎士道を批判する「ドン・キホーテ」から騎士物語へと移行することが容易でないように、先に恋愛への批判を知ってから恋愛へ、先に夢の後の幻滅を知ってから夢に耽ることへと移行することもまた容易ではないだろう。自身の「経験」の乏しさに対する自覚
- ・「私は早熟だったのではなく、成人にならぬまえに、成人の言葉を覚えたのだ。〔……〕子供の言葉から成人の言葉へ移ることはできても、その逆の移行は容易に行われないだろう。すべての成人には幻滅がある。〔……〕彼は幻滅をごまかす代りに、理論化しようとしていた。私はといえば、その父の圧倒的な影響のもとで、人生に夢をもつことからはじめて、次第に幻滅を感じるというよりも、先取りした幻滅をもって人生をはじめ、次第に夢をみずからつくりあげるということになるだろう」（48頁、改54頁）

加藤が父の議論を「採用」した理由（2）

引用7 (87~88頁、改99~100頁)

中学生の私は、もちろん、芥川竜之介ではなく、いわんやセルバンテスではなかった。知的にはいくらか彼らを模倣しているようにみえて、感情的には、まさに彼らとは反対に、幼稚なままであり、どんな経験ももっていなかった。おそらく第三者にとって、これほど魅力のない少年も少かつたろうと思う。そのことを母はひかえめな言葉で表現した、「あまり理くつっぽくても困るねえ」。そういいながら、母はおそらく父の影響を心配していたにちがいない。しかし母も十分に事態を理解してはいなかった。私はもはや小学生ではなかった。父の言葉が私をつくっていたのではなく、私が父の議論を採用していたのである。それは別の二つのことだ。私は美竹町の極度に禁欲的な家庭と軍国主義的秀才教育の模範的な学校との間を往復し、大いに退屈していたけれども、その他にどんな生活をみずからきりひらくこともできなかつた。たとえ祖父の生活に憧れていたとしても、その生活は私自身の可能性から無限に遠く離れていた。私は私自身の生活をそのまま受け入れ、それを正当化する理くつを見つけるほかなかつた。私は父の議論を採用した。しかし採用すると同時に、その議論と私自身との間のくいちがいにも気がついていた。

・一方で、父の強い影響を受けていることを認めながらも、もはや小学生ではない加藤は、「父の言葉が私をつくっていたのではなく、私が父の議論を採用していた」。中学生の加藤は、自身の主体的な判断（現在の自分は、祖父のような女性との交際を到底経験することはできない）によって、父の議論を「採用」しているのであり、父の考えをそのまま受け入れなぞっているのではない。その変化を母も充分には気付いていない
→父母の意見対立とそれを巡る加藤の態度を通じて、その精神的成長が描かれている。本章を加藤は、父からの「自立」の契機として位置付けている。加藤と父の間の「くいちがい」は、やがて父に対する「反抗」に発展（次章へと主題が接続する）

繁栄する祖母ツタの親類

引用8 (89頁、改101頁)

祖父の家が一步一步没落の道を辿っていったときに、祖母の側の親類は栄えていた。祖母の兄は、その頃実業界で成功し、独占的な大燃料会社の副社長になっていた〔①〕し、弟は海軍で昇進し、少将となり、やがて中将となった〔②〕。三〇年代の後半に満洲にはじまったいくさはいよいよ拡がりつつあったから、もとより大燃料会社の景気はよく、海軍の高級将校の威勢はいよいよ増すばかりであった。副社長はよく親類縁者の面倒をみた。その会社にはいたるところに一族が就職して働いていた。しかし傾きかけた妹の家、つまり祖父の家を救うところまではゆかなかつた。

①東京瓦斯株式会社副社長・岩村栄次郎

娘が一人おり、その娘婿も同じ会社の副社長となった

②海軍少将・岩村清一（本章11段落を参照）

「二女二男」（91頁、改103頁）とあるが、正確には「三男二女」〔鷲巣2018:24-25〕。

加藤が密かに思いを寄せていた、長女は美代（後に建築家・後藤一雄と結婚）、次女は八重子（後に東邦瓦斯社長・岡本桜の息子岡本敬吉と結婚）

→昭和恐慌と軍事的膨張を背景に、「祖父の家」の没落と「祖母の側の親類」の繁栄を、二項対照的に描写

「この提督と副社長の一家を中心とした親類一族には、活気があふれ、華かな気配があって、そのことが祖父の家の没落の過程を、ことさらに際立たせていた」（91頁、改103頁）→加藤が祖母ツタの親類に好感を持っていたことがうかがえる

加藤の大叔父、「提督」岩村清一

引用9（90～91頁、改102～103頁）

海軍少将は、若いときに英国へ留学し、ロンドン軍縮会議の頃大使館附武官をしていたこともあって、英国の文化を尊敬していた。親類の集りでも、英国人の風俗やその歴史について語ることが多かったと思う。三〇年代後半の日本で海軍の将校が外国人と交際することは少かったから、どの程度に英語を話したかはわからない。しかしよく英語の本を読んでいた。オークション・ブリッジという遊びを、私たちの家庭にもちこんだのも彼である。〔……〕私たちはこの海軍将校をあるときには「おじさん」とよび、またあるときには「提督」とよんでいた。提督は太平洋戦争の前後を通じて一種の見識を持ち、決してそれをゆずろうとしなかった。それは狂信的な超国家主義は必ず国をほろぼすということである。

・岩村清一（1889～1970）：海軍中将。海軍大学校を首席で卒業し、1930年にロンドン海軍軍縮会議全権随員を務める。矢矧・阿武隈・扶桑艦長。艦政本部長（1940年9月～）時に太平洋戦争が始まり、第二南遣艦隊司令長官（1942年4月～）として蘭印方面の作戦を担当した〔福川 2000:60-61〕。戦後は日本能率事務機社長となり、また事務能率協会・実務用字協会を作り、カナ文字タイプライターの普及に努めた。山本五十六とも親しく、海軍リベラル派の一人。一方で、「押しが弱く、不満があってもなかなか示そうとしない」性格だったという〔渡辺 2019:74〕



・なぜ、岩村は日米開戦に反対できたのか？ →加藤の反戦思想にも影響を与える

①「英国崇拜者」。常日頃から「英語の本を読む」「オークション・ブリッジという遊びを」楽しんでた。生活・心情にまで浸透する英国文化

⇔生活と外来思想の乖離〔加藤 1959:187-188〕

②「軍事技術的に考えていた」＝合理的思考

「もう一人、私のおじは海軍艦政本部長だったのです。艦政本部というのは、船を作る場所ですから、彼もやはり希望はないと考えていました。／軍人だから、政治的な状

況ということよりも、軍事技術的に考えていた。英国または米国の海軍と一国相手ならば戦争の作戦は立てられる。しかし、日本には英米と同時に戦争をするだけの船はない。だから、作戦は成り立たない。作戦計画がそもそも立てられない戦争を始めるのは愚かである。「残念なことである」といっていました。／彼は公然とではないけれど、親類の大学生にそこまでは言った。その問題に関しては、私はもちろん長い間黙っていました。彼も亡くなったし、長い歳月がたったからしゃべってもいいでしょう。私が個人的に知っていて、戦争に対して希望もなければやるべきでもないということが始まったときからいっていたのは、その二人です。／思想的問題については渡辺〔一夫〕先生はかなりご存じだったけれども、軍事技術的な面ではただ一人、おじだけでした。しかし、彼と同じ意見の人は必ず海軍内部にいたはずだと思います」〔加藤 2009:97-98〕

秩序への美意識の目覚め

引用 10 (90~91 頁、改 102 頁)

私は子供の頃巡洋艦に招かれたことをよく覚えている。それは県知事になった伯父の権力をはじめてみたときと全くちがう印象を私にあたえた。県知事には役人がへつらっていた。県庁の役人たちは、ほとんど陰惨な気をおこさせるほど卑屈だった。しかし巡洋艦の水兵たちは少しも卑屈ではなかった〔①〕。彼らはお世辞をいわず、必要最小限度以外には口をひらかず、しかし敏捷で、正確で、能率的で、艦長の客に対しては申し分なくゆきとどいていた。そこでは人間の組織が機械のように動き、ほとんど美的な感動にあたえた〔②〕。その印象があまりに強かったので、私はその他のすべてのことを忘れてしまったのかもしれない。

・加藤が、岩村が艦長を務める巡洋艦を見学したのは、1931~32年頃〔鷲巢 2018:24〕

①加藤の人間観：権力にへつらう「卑屈」な態度への嫌悪

・義理の伯父藤山竹一は、大分県知事や栃木県知事を務めた。県知事の権力に媚びる県庁の役人たちは、「陰惨な気をおこさせるほど卑屈だった」。対照的に、叔父の部下である巡洋艦の水兵たちは、「お世辞をいわず、必要最小限度以外には口をひらかず、しかし敏捷で、正確で、能率的で、艦長の客に対しては申し分なくゆきとどいてい」て、「少しも卑屈ではなかった」

・「代議士の伯父が知事になったとき、多勢の役人が伯父のまえに平伏するのに、私はおどろき呆れてものもいえなかった。何々課長というような肩書をもった男たちは、伯母にさえも平身低頭して、私よりいくらか年をとっていない息子の靴の紐さえも結んでいた。〔……〕伯父の一家は、県庁という組織の全体に自由自在に号令していたのである。私はそこに伯父の測り知れない力を感じたけれども、それをただ異様な他人事としてみただけで、少しも羨しいとは考えなかった」(43 頁、改 48~49 頁)

→加藤は権力を行使する側、権力に追従する側どちらの立場も拒絶する

②秩序や構造への美意識

- ・巡洋艦の水兵たちの組織立った、合理的な機械のような挙措動作に「美」を見出す
加藤は、装飾性を排した純粹で構造的で秩序のある「形」を特徴とする芸術を愛した。
例えば、シャルトルのカテドラル、シトー派僧院、バッハの『平均律クラヴィーア曲集』、
桂離宮、北魏の仏頭、「バウハウス」に代表されるモダニズム建築 [加藤 1996:17-35]
→「詩的幾何学」「幾何学的秩序と化した詩情」[加藤 1972:289] (≒モダニズムの美観)
- ・加藤の驚異的な美的感受性の芯には、このような青少年期の美的感動があったのでは
「加藤君は驚くべき感受性で全部わかっちゃうわけです。[……] 同時に、芸術作品のあらゆるジャンルを全部受け入れられる精神というのは何だろうと思ってしまう。それがもう一つぼくにはわからない。／驚くべき理解力ですね。文学史から何から全部そうです。強いて疑問といえばそこですね。究極的にいちばん芯のところには何があるだろうというのがわからない」[丸山 1980:313]

加藤が眺めていた「夕暮」の意味

引用 11 (91~93 頁、改 103~105 頁)

美竹町の家は、診療所の上に二階がのっけていて、その南西の角の部屋が父の書斎になっていた。父が日中その書斎を使うことは稀だったから、私は学校から帰ると夕食までしばらくの間を、しばしばその書斎ですごした。[……] 夕焼の雲は、あるときには、夢みるような薔薇色に染まり、あるときには、何か不吉な兆のように古い血のような色に染まった。またあるときには黄金のふちどりに輝き、豪華な色の饗宴を空いっぱいにはげながら、見るまに色褪せてゆくと、忽ちつめたい灰色に変わった。また雲のない夕暮には、広重の西空のあらゆる色調があらわれて、まだその色がすっかり褪せないうちに、宵の明星が輝いた。五年の間、西の空の夕暮を眺めることは、雨の日を除いて、私のほとんど欠かしたことの無い日課であった。五年間に私の感覚がうけとったすべてのもののなかで、いちばん美しく、おそらくいちばん深く私を養ったものは、道玄坂の上の西の空であったかもしれない。私はまだボナールの薔薇色も、ティントレットの劇的な赤も見たことがなかった。私はまだ油絵というものを知らなかった。

五年間の空白は、平河町の学校にだけあったのではない。しかし極端な空白のなかには、思いがけないところから思いがけないものが忍びこむことがある。

①情景描写の際に、「聴覚」「視覚」「嗅覚」「触覚」に関わる事柄を畳みかけるように叙述する(「土の香り」を参照)。とりわけこの部分は、加藤の豊かな「色彩感覚」に基づく描写であり、その美的感受性の鋭さが表れている [鷺巣 2018:77-88]

②「夕暮」の美しさを知る

- ・窓外の景色を眺める描写は、「空白五年」(75~76 頁、改 85~86 頁)にも見える。これは「全く何事も起らなかった」(96 頁、改 109 頁)、「退屈」な5年間の学校生活と家庭生活の「空白」を象徴する描写か。一方で、前章とは異なる部分もあり、それは鮮やかで美しい窓外の情景描写である。「空白」の中で養われた美的感覚

- ・また、窓外の「夕暮」に深い美的感動を覚えた。加藤は、「夕暮」をこよなく愛したと同時に、「夕陽」に重層的な意味を込める傾向がある。本章では熊六の没落による家族内部の軋轢、親族関係の変容が描かれ、その背景には日本のファシズム化がある。したがって「夕暮」は、増田家の斜陽や、大日本帝国の前途をも暗示しているのではないか

○参考文献

- 大内力 [1967] 『日本の歴史 24 ファシズムへの道』 中央公論社
- 大門正克 [2019] 『増補版 民衆の教育経験——戦前・戦中の子どもたち』 岩波現代文庫
- 小野沢あかね [2014] 「戦間期の家族と女性」『岩波講座 日本歴史 第17巻 近現代3』 岩波書店
- 加藤周一 [1959] 「戦争と知識人」小森陽一・成田龍一編『言葉と戦車を見すえて——加藤周一が考えつづけてきたこと』ちくま学芸文庫、2009年
- [1972] 「わが思索わが風土」同前
- [1996] 「同時代とは何か——藝術的創造と現代」鷺巣力編『加藤周一著作集 19 藝術における伝統と現代性』平凡社、1997年
- [2009] 『私にとっての20世紀—付 最後のメッセージ』岩波現代文庫
- 司馬遼太郎 [1999] 『「昭和」という国家』日本放送出版協会
- 武田晴人 [2014] 「昭和恐慌と日本経済——一九一九—一九三七年」前掲『岩波講座 日本歴史 第17巻 近現代3』
- 福川秀樹 [2000] 『日本海軍将官辞典』芙蓉書房出版
- 丸山眞男 [1980] 『加藤周一著作集』をめぐって——W氏との対談『丸山眞男集 別集 第三巻』岩波書店、2015年
- 渡辺滋 [2019] 「日本海軍における出身地と人間関係——堀悌吉中将の失脚と関連して」『山口県立大学学術情報』12号
- 鷺巣力 [2018] 『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか——『羊の歌』を読みなおす』岩波書店